

東日本大震災から学んだこと

4組 陳 郁惠

2011年3月11日、その日の私はまだ中学生で、いつもと変わらず学校に通って、受験生の生活を送っていました。しかし、平穏な日々を訪れたのはとても悲しいできごとでした。放課後、家に帰った私はテレビから流れるニュースを見て、言葉一つ出ないほど驚きました。流れている映像は一面に広がっている畑や、港にとまっっているたぐさ人の大きな船や、立ち並んでいる家なぞがわずかに数秒の間に全部激しい波に飲み込まれていく様子でした。何という恐ろしい映像だろう、これは新しい映画の予告だろうか、私は自分の心に問いましたが、ニュースのタイトルがこの疑問に答えをくれました。これは本当にこの現実世界で起こっていたことでした。

その後、毎日ニュースで流れているのはほとんど震災後の映像でした。見れば見るほど

心がズンズンと痛みを感じました。私にとっ
て、日本は私の第二の故郷のような国で、そ
の国の人たちが苦しめられているのを見たら
、もっと思しい気持ちになりました。あの時
の私はとにかく何とかがした^よ少しでもいいが
ら被災者たちに役に立つことがしたいと思
いました。でもまだ学生の私^が、唯一できるこ
とは募金でした。お小遣いのお金で、ウラス
メートや先生と一緒に寄付をしました。大金
じゃありませんが、私たちのささやかな気持
ちが被災者の方々の力になったらしいと思
いました。あれから一ヶ月後、東北地方に起
きたこの悲劇は「東日本大震災」と名付けら
れました。

こんな悲劇は誰も望んでいなかった。多く
の人は家を失っただけでなく、大切な家族、
友人をも奪われました。そして地震のせいで
津波と原発事故が起こって、放射性物質によ
る人間の体への影響や、土壌汚染など色んな
厳しい問題がありました。もちろん、被災者

たちの心を癒やすことも重要です。そのために、たくさんの方が日本全国から集まり、ボランティア活動をしました。ある人は避難所に住んでいる人たちに食糧や日用品を配り、ある人は子供やお年寄りの話し相手になりに来ました。そんな中で私がニュースで見ただけは、被災者たちが静かに一列に並んで、物資を受け取るどころでした。この状況なら、小さい頃は早く食べ物が水をとらうために後失物がまわらず、秩序を乱す人が出てくるものですが、その人たちはただ自分が必要な物を受け取って、余計な言葉や動きは全然ありませんでした。こ人な厳しい状況の中で、秩序を守り続けることはど人なに難しいでしょう。日本人のこ人な姿を見て私は思わず尊敬の念を覚えました。人々がお互い助け合って、支え合っていることは本当に素晴らしいことです。もう一つ私を感動させたのは、ある学生が卒業式で述べた答辞です。その学生の学校の卒業式はもともと震災の次の日に行われる

予定だったんですが、震災のせいで仕方なく延期されてしまったのです。その答辞の中で、最も私の心を揺さぶったのは「苦境にあっていても、天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていくことが、これからの私たちの使命です。」という言葉葉でした。こんな素晴らしい言葉を書いたのが中学生な人で全然思えませんでした。特に自分が悲劇にあった後、運命を嘆いたり、希望を諦めたりすることなく、胸を張って明日への道を歩み続けることは、誰でも簡単にできることではありません。

この東日本大震災を通じて、私は人間の命の強さを知りました。それに、自分の弱さにも気づきました。昔の私は、困難にあった時はいつも消極的な考えを持って「何で私だけ運が悪いの。」と思っていました。しかし、家族と居場所を全部失った人々たちの痛み、苦しさと比べたら、私の悩みは何でもないものでした。どうでもよいことで悩んでいる自分が情けないと思えました。人間は、生きて

いる限り、できなことは何一つない。この
先の道は、まだ色んな解決しなければならな
い問題がたくさんあるがもしれませんが、明
けない夜はありません。そして、自分が一人
じゃないことを忘れないうで、希望を持って明
日を迎えましよう。